

木村緑平の俳句鑑賞

はじめに

父茶楽は木村緑平の句が好きでした。緑平の話も聞かされていましたが、俳句に興味がなかった時代の私には、その話は右から左でした。荻島架人さんから、緑平の研究会があることを知り、研究会の手の木村緑平句集全巻を購入し、そのままになっていました。昭和四十四年緑平と書かれた父のノートをみつめました。父がどれほど緑平句に魅入られていたか、知ることになりました。ノートに書き記されているだけのもので、推敲や清書もされてないものです。意味不明な文や表現は子である私が手直ししました。独断、偏向があると思いますが、緑平の理解に役立てばとの思いで掲載させて頂くことにしました。

平成三十年 晩秋 佐瀬広隆

文中の*印と()の註は広隆が、また、茶楽の文の一部分の表現は、広隆の責任で手直しています。

木村緑平秀句鑑賞(その1)

佐瀬茶楽

こころ君に
まづもつて朝は国東の餅を焼く
“こころ君に” 国東のこころ (山田こころ)
から餅をおくられた感謝と友情がよくでてい
る。

小さく咲いてそれだりているハコベ
人がふりむいてもくれはないはこべは、雑草な
りに花を咲かせてそれだりている。“緑平、
俺もそのハコベではないか。” つつましい悦
びであり、幸福である。

三月二十五日

父より白くなつた髻つまみ父想う父の日

ありし日の父を懐かしむ緑平、緑平のあたた
かい心、やさしい心、寂しい心の哀歓がよくわ
かる。

父の日の齡遠うに過ぎた顔剃る

・これも前の句「父より白くなつた髻つまみ・
・」と同じである。

蛙になかれてのことすら無事とする

病妻をかかえてやすまる日とてない毎日。その日は妻の病気がいくらかよいのである。二人で春の夜の蛙を聞いている。それが緑平にとつては「無事」なのである。

皺のよつた爪眼鏡かけて切る

何でもない日常の叙景的な句に見えるような淡々とした句であるが、それは表面的な見方で、表面的なもの背後を考えるとそれは容易なものではない。孤独な虚無感にじんとこたえるものがある。

ひぐらしなかせているだけの生活である

ひぐらしが鳴いているだけで、それで足りている。作者の高い心境は涼しい限りである。

これからは葉を落とすこと外用事のない柿の木

葉を落とすことほか用事のなくなつた。枯れて死地に向かうことが、柿の木の仕事となつた。将来への落莫たる寂寥さは言葉に尽くせないも

のがある。これからの柿の木は、それは緑平のこれからの生活であり、彼の悲しい自画像でもある。

山頭火忌すすき一本さしておく

深い愛情である。一見この無造作な山頭火に示す愛情は、親や子に対するようなような温かい友情である。それと又、山頭火の一生涯も一本のすすきに象徴されているようでもある。

もつたいない何にも使われずにいる日向

「もつたいない程いい日和だなあ」という気持は我々にもある。それが「何にも使われずにいる日向」となれば日向がその人のものとなり主観化されている。こういう心境は我々は至り得ない心境であると思う。

灯がともり冬のいちにちがすみました

何という親しい「灯」であろう。冬に堪えている緑平その人の生命の象徴でもある。

師走すつかり身軽になつて柿の木

人間社会の人間もこう出来たら定めしさばさばすることであろう。悟達の心境であろう。それが悟達し得ないで苦悩する自分ではない、

と、緑平は柿の木に対して自分の苦悩を書くのである。

小包たしかに国東の餅の重さなり

こんな友情は、はたから見てもいい。

雪ふるここにもひとつふきのとう

雪の降るのに拾った、そこここのふきのとう。それは春のおとずれのよろこびでもある。

二月の雲気が合わず別れゆく

「雲が気が合わず別れゆく」の雲の擬人化、そして早春の自然の描写がうまい。

益雄の形見のフンドシでこの春息災

緑平の友情はいい、美しい。

妻のみとり

春の白い雲匙で食べさせている

緑平のやさしさ。「春の白い雲」は、妻の病気がよくなってくるような象徴でもある。妻に匙で食べさせている緑平のやさしい心情と、白い雲の明るい光りがよくとけ合って、それから醸し出される淡々と快よ深い美しさはいいようもないものがある。

手をにぎってやっておけば黙かく

この絶対的な相手の信頼性と、やさしさ、緑平の人間性が丸彫りにされたような昨である。

日光浴フンドシのなかまで陽がとどく

性に対してここまで無関心になれたら人間も尊い存在の領域にはいりつつある境地ではなからうか。

ねころべばふぐりまで春の日さしてくる

春の日ののどけけさと一体になった心境である。「日光浴・・」の句と同じである。

病人の枕元にもって来て落むく

緑平の妻も幸福であつたろう。夫のやさしさ。「自然の露でなくちや、露の味はないね。」、こんな会話も二人の間に交わされたのでえはないか。

お隣にあげる落若いのからとっておく

これなどにも律儀な緑平の人間性がよく出ている。又おらかな緑平の気持も。

看護の着物ほころびたまま春ゆく

小さいことにしばられない素朴な緑平と、妻

の看護に日毎追われる生活とやさしい緑平の人の看顧に出ている句である。

空に一つ水に一つ月が夜明け蛙なく表現にむだが一つもない。それでいて細部まで表現されている句である。きれいに空の澄んだ夜明けの月に月を写した水田の中で蛙のなく様子がよく出ている。

蠅に好かれることを貧乏という。貧乏の本質をよくつかんでいる。

白いちよう二ひきそれでたりているそれは恋人同志の二匹の蝶か、恐らく夫婦連れの二匹の蝶であろう。夫婦連れの二匹で春の日なたを飛んでいる。何という幸福なことだろう。それで緑平は「足りている」と見ている。緑平もその幸福をどんなに願っていることであろう。

夕空蛙の声になり村の灯がつく

ゆうべ、蛙が鳴き出す。村の家には灯がつく。そして蛙の声に調和して、村の灯がとけ合う。「ゆうべのよさ」であろう。

すなおなきうりひねくれたきうりもおくすなお”にとらわれるでもない、”ひねくれ”を否定するでもない。立場に立つと、人間社会のように、”すなお”な人間、”ひねくれた”人間、”すなお”なきうりは、すなおな味がするし、”ひねくれた”きうりは、ひねくれた味がする。”ひねくれたきうりもおく”というところにユーモアがある。

ゆまりさせてからふたりで見える月が満月

妻にゆまりさせてやって、それから二人で見る月、それが緑平の幸福で絵であった。脳溢血で半身不随お妻、口もきけない妻、そんな病身の妻とみる月、”健康であったらなあ” 緑平はそれを思ったことだろう。しかし、それでもこれが緑平の幸福であった。不幸のなかの幸福であった。しみじみさせるものがある。

邪魔な一本の長い眉毛大事にしておる

こんな些細なことでも人間は幸福なことと思っている。

秋の雲ながめているそれもみとりのうち

妻がいくらか気分がよく眠っている時である。緑平は”秋の雲”を、その孤独さを、妻と

結ばれている愛情で克服した。〃俺は不幸であるがやつぱり幸福〃と思つたのではないだろうか。〃それもみとりのうち〃と軽い自嘲をしながら。

おのれだけと気づきなきやめたかなかな
寂しい句だなあ。死期を知つてるかなかな、
と死期に直面する、緑平。

鉛筆でたのまれた夕べの柿もぐ
やさしい緑平の人柄ではある。

日のくれて自分だけになつてゐるかなかな
これは前にあつた句〃おのれだけと気づきな
きやめたかなかな〃と同様、死期にさまよう緑
平のすがたではなからうか。

匙でたべさせる冬の白い雲浮く
冬の終りか、冬の暖かい日である。空には早
春を思わせるような白い雲が浮かんでいる。厳
しい冬を越すことが出来そう、空にはもう春
のけはいが感じられる。病気の妻には匙でたべ
させる。そして二人で 〃もうすぐ春だ〃と語
り合つている。筆談で。前句に、〃春の白い雲
・・・〃があつたがあれと同じような心境の句

であつて、すぐれたいい句で、緑平の妻に對するやさしさや二人の幸福がよく描かれている。

ふたりねてきく笹のしぐれなり

何かしみじみしたものを感ぜさせる。笹にしぐれがかかるのであるから、寂しく冷たい自然現象ではあるが、又、その美しさではあるが、あたたかい人間のぬくもりが感じられるのである。

師走一日かかつて縫うた雑巾三枚

平凡であるが、この当時の緑平の生活がうち出されていて捨て難いものがある。

すんだことは今年の爪を切つておく

思わず自分の悲しみをため息と共に吐き出して、ほっとしている緑平の悲しい手が掌が私達の魂にじかに触れるようである。

白く乾いたおしめをたたむ

淡々とうたつたっているが、やさしい緑平の人柄がじみじみとしみてくるようである。

手をふいて今日の前垂はずす

一日の仕事が終わつてほっとした様子。一日

の仕事とは妻のみとりと、食事の世話、排泄の世話等である。それが終わってである。これも「白く乾いた・・・」の前の句と同様 誠実な緑平の人柄がじみじみ伝わってくるようである。

貧乏のたのしさはふきのとう焼く

清貧のよさというものがわかる。貧乏がはじめたものでなく、簡素さに安住しているよるこびが感じられるからである。庶民的生活はこのような生活ではあるが、一般庶民はこの貧乏を嫌悪し拒否し、否定しようとしてもがく生活である。そしてそれから脱し得られないじめじめしたみじめな暗さが貧乏の生活である。しかし緑平は貧乏のその簡素さに安住してよろこびがある。緑平にじめじめしたみじめな暗さはない。

そこでふきのとう一つ焼き夕飯にする

趣味的な生活を見せつけようとするならこの句はだめである。これは生活をありのままに表現したのでそのようになつた気持はない。自分で自己の生活を軽く自嘲を加えて見たような生活のユーモアが感じられる句である。

長生きしすぎている手の爪のしわ
老醜を軽く自嘲したのであるう。

ぼとりこれですんだ椿の花の一生

緑平自身の死も、「椿の花の一生」に似たようなものではないか、と彼自身が自分の死の暗示をしているような句と思われる。

木蓮おぼる夜の月が好きで咲く

きれいな木蓮である。これは白い花の木蓮で、紫の花の木蓮ではない。あてやかな美しさで平安時代を象徴するような優麗な美しさである。

其中日記大山氏に託す

これが別れになる日記の重さ膝におく
山頭火の「其中日記」である。山頭火が死んで二十六年も手放さなかつた日記である。それを大山氏がこの日記を刊行することになって、刊行、それは又緑平の願うところでもあつた。それでいながら、いざその日記を手放さなければならぬと思うと、まるで肉親に死別するような悲しみを抑えることが出来なかつた。そんな緑平である。山頭火、緑平の友情、うらやましい限りである。地下の山頭火、もって瞑すべきではないか。今は二人とも地下にあつて、春の

日なたを匂を拾って歩いてのことであろう。

手をふきながら見ている春の雨の糸

自然にとけ没入してしまっている。

おしめ洗って干してたんで春の一日

病気の妻のみとりであるが、ここにはもうじ
めじめした生活はない。しんみりした生活と、
緑平のホツとした嘆息と、妻への愛情がある。

茗荷の出るところになつている草とっておく

緑平の楽しみ、ほんとうの楽しみとはこうい
う楽しみを言うのである。

過ぎたことかれこれと蛙なく晩である

春の夜のあれこれと過ぎた昔の話をする。蛙
の鳴く声が聞こえる。懐かしい春の夜だなあ。

どうせ蛙になかれるので灯を消してねる

自然に没入し、自然をまるで自分の友達のよ
うに楽しんでいゝ。春の夜はいい。蛙がころこ
ろ鳴いてくれる。

八十にしてなおウソをつく口のまわりの髯

真正直で人のよい緑平の手柄がよく出てい

る。少しはにかむところにいいようもない気品
がある。

夕蛙早よから蚊帳に入つてきく

こんな楽しみのある余生はいいいなあ。長年
の芸道の探求の結果到達し得た悟道の心境でも
あろう。暗いじめじめした老人の心境ではない。
幾分寂しさのまじつた明るい朗らかなよろこび
である。

道で聴いてもどつてからのうちのひぐらし

これもさきの「夕蛙早よから・・」のよう
なよろこびがある。道できいたひぐらしと、戻
つてきて、うちで鳴いてるひぐらしと思いくら
べている緑平がよく出ている。

朝の蚊出してやって蚊帳たたむ

良寛の「筈」の話と似通うところがあるが、
緑平の場合はそんな悟達の境地を主体に打ち出
したものでなく、そう大した血を吸つたのでは
ない蚊であるから、別に殺してしまう程のことは
あるまい。そのような考えで蚊を放してやる。
人間に対する害虫であるから殺すのが普通であ
る。殺すのもめんどろで放してやるが、何かそ
こにいくらかの悟達のおいみいたいなものがあ

る。シュヴァイツァーが窓ガラスにとまっていた虻を若い医師がこれをとって殺したのを見て大変叱責した、という話があるが、これも良寛の「筈」のような悟達の境地が無意識的に発露したものと見られる。緑平の蚊もこれらと幾分通じるものがある。

はじめて咲き朝顔白く咲いている

緑平と共にこう思う。ほんとに白いと思う。新鮮で深い生命が息づいている。

昼寝のきんたまころげ出させておった
絵の方で、春画を描いて、下品でなかったなら、その絵かきは相当なある。と言われているが、この句はそれに比較されるよい例であろう。悟達のおうような句と言い得るのではないかと思う。

短い日が乾かしておいてくれたふんどし

こんなささやかなよろこびが緑平のよろこびであった。こんなことを普通の人間ならば喜ぶはずはない。こんなことでも緑平にとつては、暗鬱な生活に明るい光線がさしこんだような大変な喜びである。こんなつまらない喜びを素直に受けとつてむしりようによるこんでいる緑平の

絶対者への素直さに頭が下がるだけである。現実的な緑平が消し飛んで永遠へ一体化した緑平が存在しているようである。

これより短くならぬ日の壁にある影

魂のやすまるような平安がある句である。冬日を吸ってぬくもつた壁が、木の枝や葉の影などをとどめて、そのぬくもりをふるまっているのである。影はそのぬくもりを堪能しているのである。

年の夜の月病人のそば寝床敷く

この喜びは永遠なものである。みじめな暗鬱な生活もこの喜びによつて支えられている。この喜びは運命も壊すことは出来ない。髻剃っておけば

これで明日は八十の顔

「死にたい、死にたい」と願っている緑平にも、生きる悦びが顔をのぞかせているのではない。運命はなぜこんな緑平の願いを踏みこむのであろうかと、不平が言いたくなる。